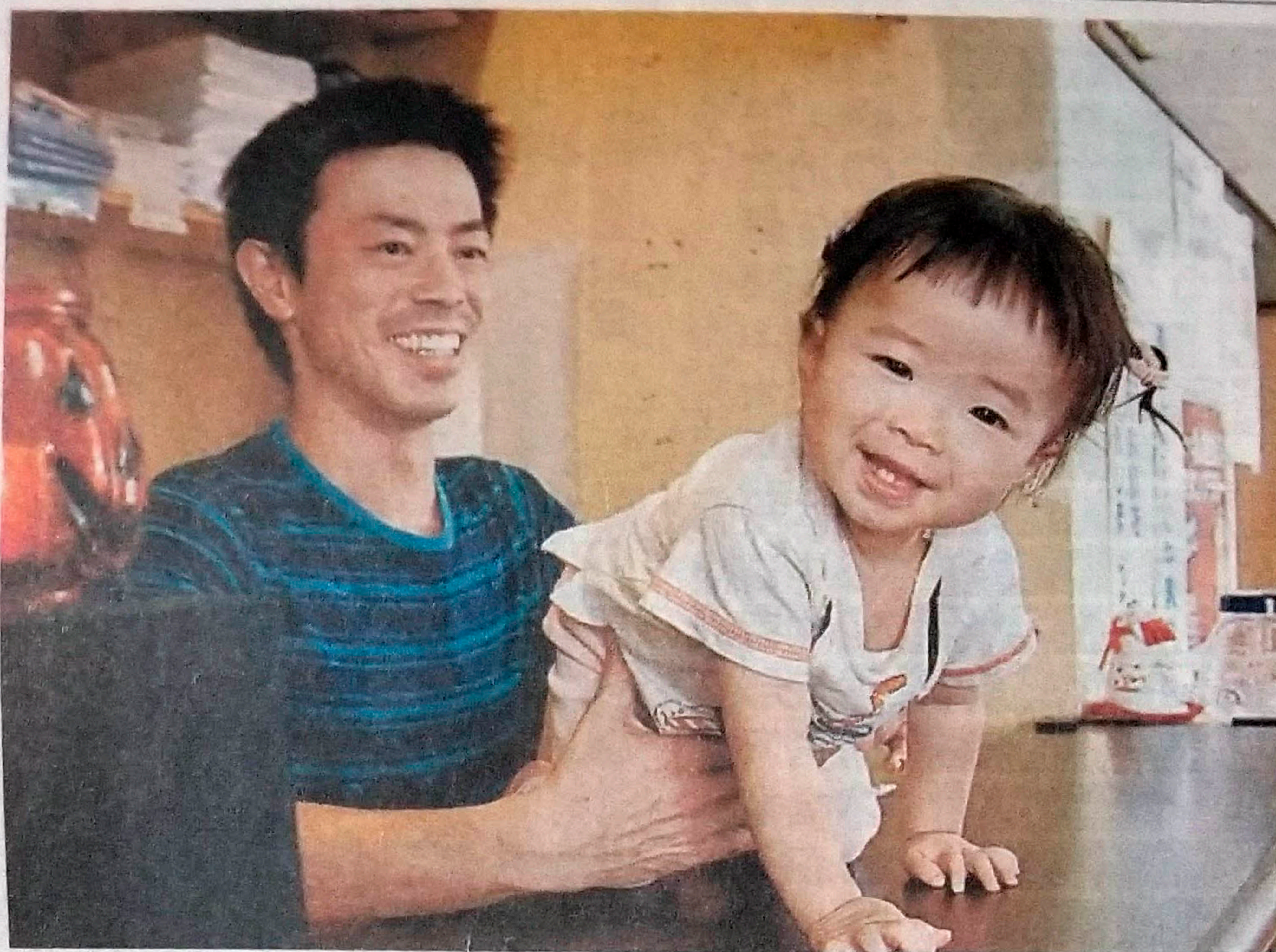


憩いの場 銭湯残れるか

札幌で、市民の憩いの場として親しまれた銭湯が減っている。今月末には北区で半世紀続いた銭湯「錦湯」がのれんを下ろす。その一方で、新たな発想で銭湯経営に乗り出す若者も出てきた。

札幌市内激減 最盛期270軒↓44軒



「奥の湯」で娘を抱きながら番台に座る古名智亮さん。札幌市北区北31条西3丁目

「錦湯」が営業を始める

午後2時、常連客が次々とやってきた。お互い顔見知り、湯船にゆっくりとつかりながら世間話が始まる。近くに住む中川智寿さん(71)は「ここで一番風呂に入るのがこだわり。気持ち良くて、家の風呂に入ろうと思えない」。20年ほど通っているという泉和雄さん(77)は「裸のつきあい、でたくさん知り合いができた。みんなと会えなくなると思うと、寂しいね」とこぼす。

錦湯は1968年に開業した。当時の入浴料は大人33円、子ども8円。周囲に

は風呂がない集合住宅が多く、家族連れでにぎわったという。父から経営を引き継いで40年になる安達誠さん(69)は「銭湯には会話がある。風呂に入るだけでなく、しゃべることでも癒やされてスカッとできる」と語る。だが老朽化が進み、建て替えや設備投資の費用を考えると限界だと感じ

た。「『続けてくれ』と声をかけられるけれど、『ごめんね』としか言えない。もう十分やってきたと思う」

札幌公衆浴場商業協同組

合によると、今年4月現在で組合に加盟する市内の銭湯は44軒。最盛期の1970年代前半には約270軒あったが、2005年に100軒を切り、この5年で22軒が閉まった。建物の老朽化や後継者の不在などが主な理由だという。

厳しい環境の中、同じ北

老朽化など影響 ■ 若い後継者誕生も

区の「奥の湯」では今年1月、古名智亮さん(36)が母から経営を引き継いで3代目の主人となった。

大手家具量販店で副店長を務めた経験があり、維持費や修理代を見直せば黒字でやっていけるといふ。同じ子育て世代向けに子ども用の風呂いすやおもちゃを用意し、番台で子どもを預かることもある。「時間も労力もかかるけれど、湯につかりながら話を楽しむ銭湯文化を若い人にも知ってもらいたい」と話す。

銭湯事情に詳しく、「いらっしやい北の銭湯」(北海道新聞社)の著書もある大学講師の塚田敏信さんによると、東京では地元住民の応援を受けて銭湯が再生するケースもあるという。

「札幌の銭湯はこのままでは絶滅しかねない状況だが、ようやく貴重な若い後継ぎが出てきた。これから彼らをどう支えていけるか、町ぐるみで考える努力をしなければならない」と話す。(今泉奏)